

同八日 雨八字頃エリアタに至る歸途伊藤寛齋を訪ふ于時風雨甚烈十二字より一字二字の間尤激烈處々の屋瓦皆飛墻垣皆崩或は屋の潰倒の爲に死するものありと云四字頃に至漸穩なり今朝陸奥陽之助等歐洲に發し佛の飛脚艦にて此風浪の難如何と懸念せざる得す五字頃大島を訪ふ頃日氣分不快故不堪長坐七字前歸寓

同九日 晴又曇又雨朝伊藤寛齋來る昨夜も彼來り疹す別に異なることなし全身にほろせ發す遠藤江戸より歸る大島來訪今日人所托の白箋へ揮毫す三字後エリアタを訪ふ外國店にて綿鏡等買得す歸途伊藤を訪ふ于時東京風雨の風説を聞昨日深川へ

行幸あり調練の  
天覽あり于時

還幸の節尤烈風永代橋を落し終に新大橋へ

御廻なり其途中處々の長屋等も倒潰怪我人死人等あり青木謙藏も此災

難に斃ると云謙藏余の舊知人實に善人也逢此難不堪愍然也歸寓服藥養病又山城屋東京より歸り余を訪東京の風説如前

(艦頭)  
今朝エリアタより所與の齒藥を用ゆ

同十日 曇朝伊藤來疹大島來訪九字過相發す遠藤山城屋本山等船まで余を送る正二郎も昨日來々泊又船まで來揚碇之時十字前也一字過築地に來着伊藤に至り食を認め其より岩倉條卿に至り六字過歸家野村來話歸途風邪の氣味にて惡寒あり

同十一日 晴平臥藤井勉三藤田與次右衛門能見隆庵内藤次郎左衛門江木清二郎伊藤芳梅廣澤障岳等來訪小酌相談逐々皆散與伊藤訪吉富横山少典醫來診夜福井亦來疹

同十二日 晴終日平臥横山來疹

同十三日 曇終日平臥横山來疹後藤象二郎來話明日より歸國の由也板垣亦同行なり土州國情過日來の云々漸鎮定すると雖も未至無事依て兩氏



此度歸國せり此藩の國情不定も亦大に今日の方法に關係せり河瀬來話

澤外務卿書翰到來

同十四日 雨昨夜河瀬翁泊す大久保甲東來話大に前途の事論す同氏も一應歸國の念あり余平生時勢を想察するに

王政一新勳功の諸藩却て今日に不宜者多し其所以は只名分名義を論し宇内の大勢を不知ものあり故に只御一新に安し皇國をして宇内に獨出するの規模を定むる不能先年名義を誤り候藩なども大勢に明らかなるものは御一新後大に悔悟し益奮勵の藩あり此等は初朝廷に盡すと幕府に盡すとの異なるものある而已にして盡す處の志におゐては皆大勢を察し不忍坐視之情より起るものあり依て今日に至り候ては其盡す所益心切也余常に薩藩我舊藩などの此に見なきを歎し百方冥々に盡す所あり敢て不貫徹漸此節纔知有其應西郷真吾の此度歐洲

より歸る其益甚多し余去年山縣狂介御堀耕助等を歐洲行せしめんと周旋せし時西郷も亦同此行の事を謀今日不圖彼我とも其益不少是又國家に關係せり山中靜逸來話去年相別れ彼奥州縣の知事たり其後今日初て相會彼來大に民政の事を論す薄暮相去

今朝吉富一家のものを誘ひ向島に至り十一字頃皆歸る

南貞助來話遂に一泊す

同十五日 晴今朝袴塚甲藏來談二十年前の舊知藤田東湖の門人也四字後神田邸に至る

老公に謁し夕宴に陪す九字頃歸家夕後曇又雨今日

豊榮神靈の

同十六日 曇十字頃大島浮田など來話余染井別莊に至る六字頃歸家又訪廣澤不在

同十七日 曇又雨山口藩の情實を廣澤に論す三字過廣澤又來話夜吉富長



等と園基

同十八日 風雨野村長崎知縣事書狀到來十二字後風雨尤甚夜三洲青甫等

と相談す山尾昨日伊藤に至り未歸今夜徹宵不能寢終に至天明眼猶魚

同十九日 晴二字來訪廣澤三字過直に岩卿へ出近事を談論し對酌到暮其

より白金屋に至り又伊藤芳梅を訪ひ又與彼乘月夜歸番丁訪吉富又與諸

子歸于宅小酌園基于時月光入坐夜色尤佳

同廿日 晴與伊藤山尾吉富長青甫末吉等王子に至り扇屋にて小憩し飛鳥

山邊を散歩し染井別莊に至り小酌相樂五字過歸宅伊藤も亦一泊

同廿一日 晴神田邸に至り正木にて山縣藤井藤田吉田等に會し其より岩

國知事公に謁す知事公過日御上京なり歸途廣澤を訪不在途中にて相逢

吉富と有約於彼寓園基於神田邸山縣狂助に逢三浦五郎來着すると云此

晚井上世外鳥尾小彌太山田市之允書狀浪華より達す

同廿二日 微雨今日

天長節に付參 朝云々又各國公使を延寮官へ被爲招待るゝに付可罷出

云々の御達あり余過日來爲病參

朝を御猶豫あり故に今朝も參

朝不致なり大島郡の僧 來訪宗旨の事を建言す

天長節に付一家相祝す 御所より酒肴と八丈二反を玉ふ

(龜頭) 三浦五郎來泊

同廿三日 晴招魂社祭禮なり駟馬の競あり宮津知藩事松平信之丞來訪山

縣狂助來訪薄暮吉富に至り又廣澤に至る辨事土方長松澤と山縣狂助

等來館十時過相去又吉富に至る十一字過歸家

(龜頭) 今夕來原妹來着の由伊藤より申來る伊藤父母も同行のよし也于時十

字過也

同廿四日 雨八字過參

朝於



御前御會議尤半日之外は近來

出御と云三字過退出于時雨甚

(燈頭)  
野村素來訪

同廿五日 晴十字頃大久保を訪ふ其より伊藤に至り妹に逢有約神田邸に至り山縣正木野村吉富藤田藤井廣澤余等と兩國中村樓に至り會議す終て相酌十二字頃皆散す

同廿六日 晴森寺弟近日英國へ至ると云過日來度々來訪故に面會す又肥後大田黒 來訪大田黒は過日來屢來訪始終行違ひ不面會今日相語る實に肥後藩の一人也よく大勢を想察せり于時又岩國知事公來駕なり今日

老公御出の御都合あり故に御歸りを相とむ大田黒等皆去二字頃女中衆皆來お園どのは不快のよし十二字過

老公御出なり高杉上山吉田岩國の長と廣澤余等倍席酒肴等を進饗清元

延壽太夫談人小三新内節 等席に出角力相生も亦來一時の一興也山

尾夫婦等皆出席十二字頃御歸りなり招魂社昨日今日相撲あり

同廿七日 神田御屋敷に至り山縣を訪ふ正木も亦來中奥まで御禮に出其より伊藤に至り五字頃歸家其より又門脇に至る門脇は今朝書狀を送れり廣澤其他坐客數人因州沖探三過日歸京今日在坐十字頃大雨漸休て余廣澤と歸る今日妹來る

同廿八日 晴九字參 朝三字過退出せり過日渡邊昇歸京今日又築前賈札一條其他の情實を聞六字過廣澤を訪ふ不在吉富に至る相談七字過歸家

同廿九日 晴九字參 朝三字過退出其より神田邸に至り於御前御國改革等之事を論す高杉監察野村山縣正木藤井權大參事藤田吉田小參事廣澤余一席也六字頃歸家

同三十日 晴名和緩來談山縣狂助來談皆公事也今日染井別莊に山縣野村正木藤井藤田吉田等と別杯の約あり十字過より馬車にて至る伊藤木梨



山尾長なども亦来る近來の一盛宴也七字歸家

十月朔 曇九字參 朝拜

天顔十字過退出神田邸に至り

老公に謁す其より山中靜逸名和緩を訪ふ于時岩卿又余を招く薩州邊の近情實説を聞く實に浩歎之事而已只自反而縮雖千萬人吾行矣之覺悟廟堂上に一決不致ては今日の事不能救なり伊藤に至り午飯を認む共に芝の紀州邸に至る今夕神田

老公より 有栖宮三岩中徳正三字和島公を御招あり春岳容堂二卿御斷吉川御兄弟も御在席にて盛宴なり三字青甫隨<sup>つ</sup>庵揮書畫八字過開散十字過歸家今夕渡邊昇來ると云

同二日 晴九字過參 朝于途渡邊昇を訪ふ不在三字頃退出神田邸に至る皆不在訪能美園碁五字過歸家

同三日 晴訪山縣狂介々々明日より浪華に至る兵部省前途の處置を談す其より土邸に至り下村珪太郎に面會す彼又國事を相談せし云々あり十字頃神田邸に至る皆不在岡松まで至り山縣正木野村等に逢ふ二字頃歸家山中靜逸來訪渡邊昇當時彈正大忠也來て時事を談論す至暮相去名和緩 來る山中等と小酌相談又弄筆墨十二字頃皆散

同四日 晴九字頃神田邸に至り正木山縣を送る其より參朝今日於 御前知縣事へ御下問あり實に知縣事の事將來の處未知其如何眞に今日の一禍難なり歸途岩卿へ出薩州一條其他御密談に預る四字過神田邸に至る于時ボードイン來邸老公の御疹察す相逢て又談す薄暮歸家

同五日 晴大久保來て國情を相談し又前途の事を論す十一字頃一同參朝彈正臺出て臺論を建言す三字過退出與大島似水有約柳橋より雇舟向島の寓に至る于時薄暮也終に一泊して相談



同六日 晴長谷川 扇源左衛門井上因碩 末吉等來る小酌園基少妓も亦數助酌四字頃より板場容堂公の寓を訪ふ于途秋月公に逢相共に板場に至る筑前秋月知藩事藤堂達雲も在席十二字過相去又大鳥似水の寓に一泊す

同七日 雨向島より泛舟牛込に歸る井上因碩末吉など同舟也今日山中等と染井行の約あり爲雨延引す終日家居夜健藏來て府情を語る又土州來る府下草莽の事を語る土州下村珪太郎より書狀到來す

同八日 雨十字參 朝三字過退出宮津知藩事來訪下村珪太郎來話同藩吉永良吉曾和慎八郎を同伴せり兩氏は板垣後藤よりの傳言を以急速東下其主意は西隅の一條なり近來西隅不尋常の説紛々起り憂世の士大に浩歎する所也昨夜備前人の西隅より歸り又此説を其藩に告るを聞余三四日を過兩氏に返答に及ふ云々を答皆去て後山尾と吉富に至て同志會談す十一字頃歸臥

同九日 曇土人 七日に來て横井斬殺の徒御所致に付浮浪の徒種々の議を生ずる事を告故に今日呼て余の又語所聞長新兵衛來訪

同十日 晴今日

老公染井別莊へ御立寄あり故に十字頃染井に至る四字過神田邸迄陪從す今夕岩國知事公御招に付其より直に深川平清に至る十字過歸家

同十一日 雨朝岩公に至り御内談あり其より染井に至る今日大島と有約光末も來る今日途中にて馬車を損し本郷加賀故邸の門前より竹輿に乘し相走十字頃歸家

同十二日 晴朝參 朝西隅の情と論じ御動搖に至らざる様に愚意を陳述す三字退出備前香川某の招によりて廣澤長松等と橋場の小倉屋別莊に至る十字頃歸家

同十三日 曇朝客來不絶十四日 老公御立に付歸國の人々も亦來て告別過日來惠金の人も亦不少今夕大久保と有約賣茶亭に至る心事を語り論



前途然後且酌且弄筆墨至夜雨十一字頃乘輿て歸る

同十四日 雨御堀長崎よりの書狀達す今日

老公御立なり九字神田邸に至り廣澤野邨吉田等と同車鮫洲の川崎に至る廣澤は是より歸り余三人は直に

老公に陪從し金川に着す于時三字過也伊藤芳梅も亦來り共に至横濱に至り十字過蒸氣船にて又金川に歸り屋泊す

同十五日 朝曇夕晴八字頃出發乘竹輿土塚屋にて午飯を認四字前鎌倉に至り屋に泊す夜能美等來て圍碁

同十六日 晴朝 老公に陪し八幡宮鎌倉宮廣元季光二公の墓に詣其より

御先へ金澤に至り千代元にて午飯を認此千代元は十六七年前宮田成營浦賀留學中來游せし樓なり其後焼失只存家名而已人亦皆異なり東屋御本陣故東屋により其より野島西の屋より雇舟横須賀に渡り屋に泊棹了助兵動來て催一酌

同十七日 晴八字頃

老公御出なり佛人チボヂイ

甚周旋す十二字頃諸局御覽相濟實

に一壯觀也其より山尾の役宅に御出上下酒飯を認二字御乘船四字横濱御着御本陣は深水屋なり余等遠藤に至る夜穴戸敬字を山城屋に訪ひ終に相泊す

同十八日 雨一字過

老公に陪し英公使パークスを訪ふアハダムスロフソンも亦來る四字頃御歸直に遠藤へ御出なり五字過御歸館被遊穴戸能美吉田など來談能美と爭碁夏六月當港へ御着艦の時與能美四戰四敗其後又屢敗北過日來屢戰屢勝終に今夜彼をして二目に至らしむ彼は呼憾余呼快て相別

同十九日 雨今朝長崎野村知縣事と御堀耕助とへ書狀を出す杉奥平小幡等への書狀も吉田に託す昨夜お園様は着佐の茂へ御泊なり十二字頃御尋問いたし其より御旅館に至り拜謁し無間船場まで御送り申上て歸る



此度御歸國に付秘藏の香爐を呈進す○西隅の近情甚御懸念あり尙廉々被仰置し思食あり○近來地震屢あり近日小地震日不絶ゆれり今日シミツを訪ふ十七日着港直にシミツを訪ふ于時正二郎風邪にて咽喉を痛み今日も未至於全快故に此度

老公へ拜謁いたさする能はず甚残念なり二字歸家伊藤寛齋周布金槌來訪伊藤芳梅此夕歸京

同廿日 雨十二字シミツと有約野村素軒を同行す今夜又素軒伊藤寛齋大黒屋禎二郎等と崎陽亭に至る

今日シミツの話に字佛の戦佛人益奮激人皆戦闘の用意をなし只斃て休矣の決意なりと平定の期可未謀

(籠頭) 今日 穴戸三郎横須賀に至り歸途來り尋と云

同廿一日 晴九字過素軒歸京今日柏村數馬杉孫七郎奥平數馬等書狀到來九字過エリオタの出張に至る齒齦を療治す伊藤長翁父子も亦來十二字

歸宿夜中島四郎來話

同廿二日 雨十字伊藤寛齋來る共にエリオタの出張に至る療治如昨日十字頃歸宿光田三郎周布金槌來る夜岡 竹田庸二郎來話

同廿三日 細雨九字過伊藤貫齋來る共にエリオタの處へ至る總て如前日十二字歸宿岩卿廣澤山尾吉富等へ書狀を出す今夕伊藤長翁と有約五字至彼宅認酒飯明日寛齋至東京彼過日中典醫命あり留別之意なり長翁二子二孫皆在席中山槐宇亦來て同飯す槐宇は余十五六年前浦賀に留學せし時浦賀の與力也子新太郎と東條麗藏と學蘭書此時鶴殿幸八亦在門此生越後長岡の藩にて忠直の士也後幕に被舉近來死去せりと云可惜之士也夜雨九字頃歸宿

(籠頭) 今夕大久保より書狀到來直に返答を出す

同廿四日 朝如前日エリヲタに至る歸途シミツを訪ふ今日寛齋の息エリヲタの處に至り通辯す曾て民部公子と云今夕龍驤丸に有約一字過小蒸氣船



にて迎に來る二字前艦に至る中島四郎在艦船將、副將兼坂熊四郎々々は十年前之知己也艦中を一見す且酌酒談時勢又語舊五字歸宿夜柏村、檜崎頼三郎來る兩士は不日佛國に渡海す共に佐の茂に至り酌酒毛利藤内亦共に遊學の志あり過日來て滯横濱今夕來て相談大黒屋禎二郎も來て助坐十一字頃歸宿  
(艦頭)今朝

柏村明日より一應東京に至る廣澤への書狀を柏村に託す

同廿五日 風雨昨夜四字頃より腹痛胸痛甚激屢下痢を催し七字頃に至り漸緩六七度大熱相發脈度凡百廿一度十二字後病勢大に屈す十字頃伊藤長翁來疹服藥を調合せり沸騰散と、三字過門人、來疹す夜周布金槌來話

同廿六日 晴今日病大に緩也九字頃伊藤長翁來疹夜光田曾根又橋本、來話せり

同廿七日 曇今十一字シミツと有約彼居に至る共に十二字五番の會食に行始て會食所の家宅の居置間取を見る其規則實に妙自然と愚者亦不得不知其より一旦シミツの居に歸り又共にフランス軍艦、に至る歸途大雨衣服如洗四字過歸艦今日龍驤丸の艦將手嶋五一郎副將兼阪熊四郎と約し崎陽亭に至る于時雨又甚九字頃歸宿光田三郎來話大久保の書狀到來辨事よりも御用狀來る皆歸京の催促也

(艦頭)田村幸、同道せり

手島

中島四郎同伴

同廿八日 快晴宮川土木正の來訪元熊本藩にて宮川小源太と云十一字エリオタを訪ふ有客三字の來約をなす今朝山口の杉柏村奥平和田平原浪華の井上山田等へ書狀を出せり有富源兵衛の手代自蝦蟇より歸り來り尋三字エリオタの處に至り告暇水藥を贈る七字英人センデと有約シメ



ツ正二郎と同道彼の寓に至る外國人同客七名あり其中一人士官去年セ  
ンデと同箱根宮の下へ來れり十字過歸宿

同廿九日 晴十字弘明丸に乗艦一字永代へ着す伊藤も同道せり二字  
過林半七の宅に至り岩卿へ出近情を承得せり五字過歸家

閏十月一日 晴朝名和緩來る十字過神田邸へ至り宍戸敬宇と染井の別莊  
に至る山尾も同行せり近邊に菊花を以種々の作物あり與諸氏一見す于  
時雨伊藤芳梅も亦來る七字頃歸家宍戸を同行せり

同二日 晴朝大島似水來る廣澤來訪近情を承得せり國情種々の苦辛不少  
野村素軒來る九字過參 朝三字過退出四字過久我兵部少輔を訪ふ又吉  
富に至り十一字歸家

同三日 晴九字過參 朝四字退出直に伊藤寛齋を訪ふ不在又芳梅を訪ふ  
大隈も亦來西國の近情を聞天下の事實不如意十に八九薩州などの如き

今日の情實實に爲天下に可歎也芳梅米行の事も今日決せり只貨幣の煩  
至來年盡消滅せんを祈るもく女彌澤田へ嫁する事を約し來る五日  
婚姻と約せり八字過歸家今日南貞助浪華より歸り來ると云井上省三も  
亦來れり英人も來訪すと云南校の教師なり○余頃日腹瀉にて困  
めり今晚福井來

同四日 晴昨夜來腹瀉にて困めり終日家居伊藤大典醫同中典不圖來訪依  
て煩疹察福も亦來

同五日 曇四字過雨四字澤田を同道して伊藤芳梅來る今日もく女を  
澤田へ嫁せしむ河瀬夫婦幾姥野村木梨山尾夫婦同座傾酒七字過山尾夫  
婦もくを誘ひ澤田の宅に至る十字過皆散福井來

(龍頭) 大久保より來狀參議引受け分課等の事申來る

同六日 晴野村一泊して今朝去吉富來訪福原内藏之丞林秀二郎來訪明日  
容堂公と約あり不快のよしにて今夕斷申來る



同七日 曇又雨十字頃元本丸内火藥藏發火余不快故不得參

朝南貞助周布金槌來訪

同八日 晴十一字頃與山尾ヨヨ木齋藤別莊に至る十年前來嶋又兵衛と至于此地開墾甚纒今日其地皆茶園となり自ら幽閑の趣あり六字頃歸家齋藤福井吉富河瀬など來話齋藤一泊

(龍頭) 今日白ギ一公使參 朝

同九日 晴與山尾齋藤至于染井別莊植木屋を廻觀す皆于此一泊す下村銈太郎書狀來る今日大明竹一鉢を買ふ

同十日 晴十二字後山尾齋藤と染井の歸途湯島邊を散歩し奥原晴湖を訪ふ六字頃歸家

同十一日 晴十二字後廣澤を訪ふ伊藤芳梅伊藤大典醫來る湯川平馬來訪過日來島と蝦蟇より歸り來れり藤田與二右衛門來る四字過芳梅と兩國梅川に至る吉富福原三浦等已に來て有坐八字頃歸家

同十二日 晴參

朝三字退出其より廣澤と宍戸敬宇を神田邸に訪ひ共に上野松源樓に至り晴湖亦來る七字過皆散

同十三日 晴九字頃馬車にて與廣澤一同參 朝今日大久保余を

御坐に被爲 召時情 御尋あり四字頃又與廣澤同車にて退出せり遠藤謹助來談普國公使ホンフランより書狀到來明後十五日十二字余を彼旅館へ招けり

同十四日 晴十一字過染井別莊に至る今日ホードイン來訪伊藤大典醫誘引せり山尾吉富福井なども亦至る六字過歩月て歸る

同十五日 晴南風甚烈滿街捲塵十一字頃麻布春桃院宇公使の旅官に至る魯人 英人來て有席副島亦在席十二字過同食し且談話す四字相去英人サト一を訪ふ不在其より築地に至り伊藤大隈を訪ふ十字過與山尾同行歸于家太畑夫婦來泊



同十六日 晴十字過至築地與伊藤等深川平清樓に至る伊藤米行之離杯也  
今朝作間正之助來訪余誘て至る今朝佐々木參議も來話  
(龜頭)  
十字頃伊藤へ歸り一泊す

同十七日 晴九字參 朝四字退出來嶋來話薄暮廣澤に至る伊勢小湊畫帖  
を贈る

(龜頭)  
今朝家僕不來途中にて大隈の馬を見かけ乗して參 朝せり  
同十八日 晴九字參 朝四字退出廣澤と平岡に至り其より伊豆文樓にお  
ゐて肥米田津田因冲等と會す野村素軒も一席なり九字歸家

同十九日 晴九字參 朝三字過退出廣澤と神田邸に至り藤田固屋にて宍  
戸等と相會す頃日飛脚到着杉猿村書狀到來八字歸家

(龜頭)  
黒田了助參 朝建言

同二十日 晴九字參 朝四字退出與廣澤同車染井に至る宍戸も亦後れ來  
る晴湖も亦來小酌閑話廣澤と連枕て臥す幾お清妓來る夜雨

同廿一日 晴朝與宍戸植木屋を游歩す十二字過岩國知事公御兄弟御出長  
新兵衛陪從せり二字過山内容堂公御出十字頃御歸りなり井上因碩長三  
洲山尾庸藏宍戸敬宇等陪席

同廿二日 晴十二字過英人ダウス來る 同行三字過歸る山尾も亦  
同席相談

同廿三日 晴朝近邊の植木屋を游歩す十二字頃魯人 李人ケンフルマン  
來訪三字過皆歸る木梨山尾南同席今日歐羅巴の近情を語る山尾南等と  
又近邊賣宅を見す四字頃より馬車にて神田邸に至る木梨米行の一條な  
り五字過歸宅土州板垣福岡等出京書狀到來藩政改革等の一條談合云々  
なり

同廿四日 晴九字參 朝三字退出山尾と共に今日參 朝工部省權大丞を  
蒙る工部省の一條夏已來屢建言議論紛々漸過る十九日御決定に至れり  
北川松原に書狀を出す三宅庸助柿野三郎の一條なり二人去年來放蕩屢



教訓を加ると雖も終に改心せず終て脱走に至る杉孫七郎へも國事に付一書を出す

同廿五日 晴九字參 朝三字過退與廣澤土方之離杯に至る松本樓に相會す七字過歸家後藤より書狀到來今日板垣福岡參 朝藩政之事を建言す

(籠頭) 會て與板垣藩政等の事を談す

同廿六日 晴渡邊昇來訪時勢を談論す今日南風尤烈

同廿七日 晴九字參 朝三字退出訪板垣福岡にも亦不圖面會す其より伊藤寛齋を共に 米醫の處に至り疹察を乞ふ歸途伊藤芳梅を訪ふ彼明日發足不日米行をなせり木梨平之進亦同行に決し昨日余の家を去り伊藤に來れり木梨は有志の士余の舊知己也然して同氏弱質欲至死數度余當夏促して同行東京に至り余の家に滞在す伊藤大典醫等大に力を盡し近來身骨壯健終に此行を決せり余亦甚喜十字前歸家

同廿八日 晴九字參 朝三字過退出與廣澤神田邸に至る四字過歸家山縣

狂助來話

(籠頭) 夜三浦五郎來話齋藤も亦來り談

同廿九日 晴五字參 朝今日は大宮へ

行幸あり六字過坂下御門外にて

御輿を奉送る三字退出歸途神田邸穴戸を訪ふ無間歸家又長三洲の新居を尋ぬ其より吉富を訪ひ六字頃福原吉富と歸家同食す

霜月一日 曉雨十二字頃より晴今朝黒田了前來話魯人面會云々又過日彼に論する所の洋行一條也永安和惣太畑鹿島等來る齋藤篤信齋來話伊藤大典醫不日洋行來て告別四字過江藤を訪今晚宿直なり直に皇居に出す正三卿御同直なり夜御酒饌を玉ふ

同二日 朝晴夕曇又微雨三字過退出五字

還幸夜吉富に至る



同三日 晴九字參 朝四字退出井上世外來話一泊

(龜頭) 井上省三來るケンフルマンの傳言なり

同四日 晴九字參 朝四字退出直に廣澤に至り時事を相談す歸途又三浦を訪ふ三浦又余家に至る

(龜頭) 朝河野檜崎等來る

同五日 晴朝山田市之允來話十一字染井に至る今朝條公より御書翰來る直回復す

同六日 晴朝廣澤に至る十二字前歸家長安川瀬來訪一字過馬車にて築地に至る途中に毛利恭助吉井源馬田中顯助井上世外に逢ふ後刻賣茶樓に會するを約し余別て柳原卿を訪ひ又平岡兵吉を訪ふ談話中不圖我君之實弟、今に大島郡、に現在するを聞五字相去直に賣茶に至り八字歸家伊勢小浜杉猿村などの書翰到來倉敷權大參事、來訪時に外出中なり

同七日 晴九字參 朝四字過退出夫より與廣澤神田邸へ至る皆不在直に歸家于時藤田與次右衛門來訪又共に至廣澤御國よりの書狀等を披見す八字歸家藤田一泊す河瀬夫婦も亦一泊

同八日 晴神田邸の馬車にて伊藤寛齋之宅に至り共に又築地之ヨシハン寓に至る不在歸途相逢て伊藤芳梅之宅にて疹察す夫より大隈を訪ひ直に參

朝于時今日條公の御宅にて會議あり三職已に退出依て又條公の御宅に至る六字過歸家夜雨

同九日 朝曇十字過より晴九字參

朝三字退出夫より延察館に至り蘭公使に逢ふ正三徳大寺大久保佐々木大木吉井等皆出會なり五字過歸家大島似水來訪今夕廣澤より招あり一家皆至る嘶家文喋等來て在坐

同十日 晴六字頃出家大隈に至る正三卿已に來て在佛在暫大久保來る相



共に品川沖 艦に至る英人 同船なり大隈爲病に不加 本  
燈明臺見物之爲此行をなす十二時横濱に達す英公使ハークス夫婦コン  
シユルロブソン書記官サト一等乗艦サト一等來着後始て面會せり二字過  
横須賀に至り製鐵場見分夫より 屋に至り小憩七字過歸艦夜ハーク  
スサト一等と相談す今日西風烈

同十一日 曉雨終日曇天七字前横須賀を發し四字下田に至る今日も亦西  
風甚烈三ヶ本に至り燈明臺を只海上より見揚陸する能はず下田に揚陸  
し半田屋に小憩す十字過歸艦

同十二日 曉雨風勢漸穩六字揚碇三ヶ本に至る昨夜始て點燈々明臺に登  
り一見す此燈明臺皇國第一等の部也點燈之處尤窮奇巧八字過下田へ歸  
り十時過揚碇直に蓮臺寺村 屋に到り温泉に浴閑靜最妙余十七年  
十六年兩度此處に至る十七年前の時は魯國軍艦來泊水師提督フーチャ  
ーチン此港にて大暴浪に逢ひ船終に覆没下田港の人家盡流没死人近千

餘此時中村百合藏と蓮臺寺村に至り宿す宮田成營の時也此行於宮根山  
中大地震に會す十六年之時は浦賀より商船にて此港に至る又蓮臺寺村  
に一泊し其より戸田に至る去年フーチャーチン此地にてスクーネルを  
造調して歸國す余我藩に建言し終に此處の大工兩人を雇ひ於我藩スク  
ーネル艦を造調す是我藩艦を造調し海軍の事を唱最初也此時諸藩  
皇國內外様の艦を造る纒に一二藩而已此行下田に来る中島三郎助爲余  
に周旋す三郎助は去年於箱館父子三人戰歿余此人の義直を常に稱し去  
年も當主家之變狂氣痛心方向を誤らん事を察し爲此人に居處を尋ね時  
情を具に忠告せんと欲し已に箱館を發せしの後にして不及實に一世の  
遺憾也此十六七年の間千變萬化筆頭に盡す能はず余尙保生今日至此地  
意外の意外

君父の鴻恩不知所報四字英人サト一等來る正三卿大久保など、同船川を  
下て下田に至り半田に至り酒食を認十字過歸艦



同十三日 晴昨夜十二字揚碇房州 に至る風浪甚烈終に燈明臺を見分  
する能はず十一字相州劍崎燈明臺に至り諸器械を揚げ三字過に至る六  
字頃横濱に着船正三卿大久保と一同通商司會舎に至り相泊す余直に正  
二郎の處に至り携歸り相泊す

同十四日 晴九字正三卿大久保歸京余はエリオタ之處に至る十字過馬車  
にて相發一字過築地に歸り伊藤の宅にて午飯を認大隈を訪ひ歸途神田  
邸に至り又廣澤を訪ひ七字歸家井上彌吉來泊

同十五日 晴十字前參 朝數件條公より御下問あり廣澤西上の事も相決  
す薩州國情も爲公私苦心せし處頃日吉報を聞爲天下不堪喜也四字頃退  
出歸途大木を訪ひ小酌相談歸途廣澤に至り七字頃歸家山尾常二郎洋行  
之事黒田了助に相話す

同十六日 晴作間正之助檜了助來話四字馬車にて作間と築地伊藤大典醫  
を訪ふ不在五字過歸家山縣素狂來話伊藤大典醫留守へ來ると云

(籠頭) 品川彌二郎ニユーロクより書状を送る歐洲の近情を書せり

同十七日 晴九字過參 朝十二字頃より雨甚二字頃廣澤と同車にて退出  
廣澤直に來話四字過與山尾三浦五郎を訪ふ過日五郎新宅に移れり至晚  
雨尤甚今日舉家猿若に至れり

同十八日 雨此風甚九字過參 朝三字退出今日横村半九郎船越洋之助へ  
一書を出す大木民部大輔江藤中辨を招請す廣澤も亦來話殿川一助着京  
又來訪阿福小照二妓助酌十字頃皆散二妓一泊して歸

同十九日 晴朝大久保來て國情を語る昨冬余與大久保奉  
勅旨各歸國爲長薩益

王事に盡力せんことを圖り不圖紛擾の時に遭遇し終に以干戈兇徒を鎮  
在し不能遂其志荏苒今日に至り今日其機に投し又各歸國欲有畫事依て  
相議して十一字頃共參

朝三條公へ旨趣を言上す三字頃退出歸途廣澤に至り五字歸家條公御書



翰來る

同廿日 朝曇又雨九字三條公に至る其より直に參

朝四字過退出與廣澤訪宍戶敬宇六字過歸家今朝齋藤新太郎 屋敷

一條に付來談今晚も亦爲其に來談

同廿一日 晴宍戶敬宇山縣素狂片野十郎林半七三浦五郎内海精一郎名和

緩澤田等來話

同廿二日 曇十字過染井に至る歸途後藤を訪ふ不在山尾を新居に訪ふ四

字過歸家篤信齋老人來訪南貞助來訪貞助は近日より英國に至る余曾て

爲彼に此行を周旋す彼今日來て告別又乞藏言一泊して去

同廿三日 晴十字參 朝退出懸正三亭にて集議五字歸家夜齋藤新太郎富

藤兵衛福井順道河瀬知縣事來訪

同廿四日 風雪三條公より書翰到來今日新嘗祭に付休暇之處昨夜南校御

雇の英人 を斬害し亂暴人取締等不相立右府公よりの御催促

により廣澤と一同參 朝三字退出過日來友人其外所託の書畫帖額面等

を認板垣退助來訪五字過廣澤來る一同神祇官へ參仕今日新嘗祭に付諸

官員も參仕禮拜等あり十二字歸家

同廿五日 晴九字參 朝今夕於

御前大久保參議一同

御内命あり尙於辨官御達あり

木戸參議

此度御用之儀有之山口藩被差越候段 御沙汰之事

四字退出築地兩伊藤平岡等へ至り八字過歸家

(籠頭) 昨年來國事に付大久保と厚く論議せしことあり此度の行も亦其に關

せり野村大參事井上新一郎橋市等來泊

同廿六日 晴終日家居客來數十名朝七字より夜十二字に至る岩國長下

等來て藩政を論せり



同廿七日 晴九字參 朝今日於

御前國法御會始あり三字過退出其より後藤と一同馬車にて今戸容堂公の別莊を訪ひ十二字過歸家頃日英人暗殺の者探索尤嚴なり或は歐洲各國の法に隨ひポリス等を起すの說紛々あり余故に云く今日上下の情を近くし上下相和する時は東京中の人民皆耳目なり上下の情相和せざる時はたとへ數千のポリスを起すとも亂妨を防ぐこと能わず政府は人命を保護し重するは何ぞ歐洲の人を難に逢時而已ならんや常に我國の人の非命に斃るゝ時に於ても其吟味を盡すこと尤肝要なり然るに歐洲の人の難に逢時は其國の公使等の責を受ること切なる故に探索等も亦如此嚴密にして我國人の難に逢時は吟味甚疎なり如此事常に余慨歎する所也故に大に此主旨を政府上に相論議す余の見獨り今日に異なり

同廿八日 晴朝來坐客不絶三字過馬車にて黒田了助福岡藤次宍戸三郎門脇、を訪ふ後藤大隈山口江藤等も亦來る薄暮島團右衛門を訪ふ夜廣

澤三浦長吉富福井河村有吉齋藤杉山等多客來訪酌酒告別十二字頃皆散

同廿九日 晴九字頃馬車にて發す皆門前に送る其より廣澤に至り用事を談し直に大久保に至り共に同車に乗り十二字横濱通商司役所に達す正二郎來る共に山城屋に至る藤井野村殿川等に逢ふ井上省三南貞助等來る大隈山尾等來談皆送て海岸に至る于時四字五字揚碇

(龍頭)  
艦名ヲルゴニヤ

同三十日 西風甚烈

十二月朔日 十二字神戸著平生多くは七字八字に達す昨日西風之烈なる故三四字を延引す長門屋に揚り其より直に川蒸氣にて浪華に至る松島より揚陸常安邸に至り小川を訪ふ不在尾道屋に至る宿所と定む于時佐々木次郎四郎河野龜之進等と南堺辰に至る小川宗像など會飲

同二日 曇井上世外山田顯山縣素狂等朝來余の居所を尋ね終界辰樓に來



る依て相共に又京久樓に至る鳥尾河野等も亦來會す二字過與世外富田樓に至る土人岩崎某高野兵部少丞馬渡某在坐

同三日 晴七字過出宿屋禰舟にて難波橋下に至り利涉丸に乗り八字過揚碇四字過伏水に達す流水を蒸氣船に<sub>て</sub>浜る此行始なり世の開化に趣往時を追思すれば似遅<sub>る</sub>實は又速也余七八年前之事を想像するに今日生存如乘此舟は意外<sub>に</sub>又意外也龜甲屋より竹輿を雇ひ入京都于時六時也至槇村其より柏樓に宿泊す

同四日 曉天風雪開戸眺望すれば東山鴨水一面<sub>に</sub>銀世界風光難筆畫岩倉卿より來翰茶と洋酒を贈らる十一字過大久保を月波樓に訪ふ不圖村田新八に逢ふ且談且<sub>て</sub>四字過去て前田松閣を訪ひ直に岩卿に至り時事を密談す七字頃歸宿今朝萊山來る平原浪華より來る夜又來り談す

同五日 晴雜客來訪二字頃大久保を訪ひ共に岩卿に至り留守官京府等の事を論し夜十時頃歸寓

同六日 晴槇村藤村兩參事來て京府の事又時勢等を論せり余依て愚論を陳述す十二字前相去大久保又來訪三字過萊山平原等と八新樓の天狗會に至る鳩居老人も亦來會歸途清雅に至り又萊山に至る十字頃木屋町に歸り井上婦人の寓を訪ひ十二字頃歸臥

(龍頭)  
藤村兵部省より出仕せり

同七日 晴雜客來訪山縣素狂高屋<sub>ら</sub>從浪華來る日田縣へ出兵等の一條なり余已に過日岩公の亭におゐて大略を議決す依て今日又岩公に至り其沙汰等の云々を論述せり過日浪華へ着し浮浪の徒僧徒其他不平輩を嘯集し日田縣の人民を煽動し一揆を起し官廳を襲ひ又防州大島郡へは兇賊亂入金穀を掠めしの風説を聞多くは大樂其他當春長州の脱賊の關係ありと聞依て已に取締の件々を論議し置り今夕前田松閣來る彼過日來兩度來訪曾て在京中余の病を<sub>て</sub>疹せり槇村藤村等より書を頼めり依て揮毫今夜中村樓へ井上婦人等の案内せり五字頃祇園社に參詣し直に樓



に至る絃舞助酒山縣高屋等も亦來る十字過與高屋彼寓松力に至于時舊  
知の君遊なるもの來て在坐一時の笑談を發せり十二字歸臥

(龜頭)  
大久保今朝出立せり

同八日 昨夜來雨雪東山の風色も亦妙雜客頻に來る東京への書狀青木周  
藏字國への書狀等楨村に託せり半紅の絹幅の一軸を萊山より買得せり  
四字過相發す伏水龜甲屋に至る已に滿街點燈の時なり山縣高屋已に來  
て在龜甲樓

同九日 晴七字淀舟に乘し流れを下る四字比網島に至り井上彌吉を訪ふ  
不在老人に逢暫相語壯健如舊山田を訪ひ談話至夜佐々木松本河野井上  
等亦來る終に一泊す

同十日 晴山縣鳥尾等來る十二字過渡流井上世外を訪ふ彌吉も亦來六字  
過去て大久保を訪ふ不在藩邸に至て泊す

同十一日 朝微雨又忽晴九字過大久保に至り共に岩卿御旅官に至り會議

終て相共に造幣局に至る其器械足驚目從來造幣の疎なる至今日不得不  
生其弊井上馬渡等周旋し英人キントル巨細に其局々にをみて器械等の  
事を説き終に薄暮に及歸途大久保に至り酌酒圍碁々名手兩三名相會す  
(龜頭)  
河村兵部大丞と松方民部大丞東京より來會

日田縣騷擾の一條に付太政官より鎮靜方御委任の御書付到來せり

同十二日 晴九時大久保に至り共に又岩卿に至り兵部省出張所に至り調  
練を見分す終て又城内諸局を見分し天主臺へ登り眺望す實に豊公の  
規模思ひ見るへき也二字過歸邸山縣高屋來て土州の近狀を聞く高屋日  
田行の事を止め歸東に決す依て又岩卿へ出山田高屋等と相會し林少丞  
高屋に替り出張に相決す七字過相去歸途大久保を訪ひ直に歸邸  
同十三日 晴客來不絶四字過大久保に至る不在直に岩卿に至る談話數時  
歸途高麗橋より平原と乗舟水淺くして不能行終に陸に上り  
小川も亦來十二字過堺屋に至て一泊す



(龜頭)  
今朝十餘箋に揮毫す

同十四日 晴十字過歸邸廣澤三浦後藤等に書狀を出す客來滿坐井上山田山縣等來話今朝岩卿始乘艦の都合也爲風波不能乘艦依て山縣等も亦歸ると云近情不安件あり今夕井上より傳承す依て三條公へ一書を呈す今夕亦十餘箋に揮毫

同十五日 晴七字松方來る共に乘舟天保山沖に至り肥後蒸氣艦乘る于時漸々風浪相起り遂に兵隊乘艦する不能故に又與松方天保山に歸る四條陸軍少將林少丞鳥尾小彌太等に會し明日乘艦の手筈を約し又運上所に至りざこ揚茂左衛門橋北詰松屋榮二郎方へ泊す小松屋勝二郎の出店也於福屋鹿島等も亦來る

同十六日 晴六字過運上所に至る與松方同舟川口に至り又役船に乘移り龍雲艦に乗込十一字揚碇伊豫之至 夜一字也投碇て泊夜雨

同十七日 終日晴雨無定五字過過上關沖六字頃西風甚潮水東に流十一字

頃豊後姫島に至り一泊

同十八日 晴五字過揚碇十一字頃至馬關揚陸四條少將始諸官員伏水兵隊二中隊小倉より揚陸余綱三に泊す野村靖李家文厚宗像宗十郎平原平作小松、池良等來る

同十九日 晴市中を散歩し舊知のものを尋ね龜山に參詣し五字過歸宿夜與大中遠田等大坂樓に至る此樓新に小樓を築此坐敷に小酌す能乃等亦來十一字過歸宿遠田宗像小妓三名を携て又來

同廿日 晴雨相半李家片山野村能乃入江宗像紅喜池龍油清平原大木玉池其他數客來訪小酌談論終に自朝夜十二字に至る

同廿一日 晴送客滿坐十字發にて送て至關門小月にて認食厚狹にて國弘(龜頭)に小憩六字前舟木大庭に至る阿部少史内藤玄泰等來る十二字皆散  
林 來る

同廿二日 朝内藤玄泰老母來る九字過舟木を發し十一字山中を過一字過



小郡に至り小泉屋に小憩す北川清介等來秋元新藏等も亦來尋ぬ三字過  
鴻城に入る于時官廳皆退出依て柏邨大參事を訪ひ六字歸家中山澄江來  
る、利兵衛小郡近邊まで迎ひ來る

同廿三日 晴三好軍太郎大津四郎右衛門中山勝士柏村杉兩大參事久保小  
參事吉田白根大屬等其他數十人來訪曉より晚に至りて不絶六字頃湯田  
瓦屋に至り一泊す于時久保大津其外中村芳三郎三好軍太郎瀧彌太郎杉  
山宗一大岡大眉十餘名相會す

同廿四日 晴十二字前瓦屋を出高杉野邨毛利を訪ひ直に官廳に出

兩公に謁す此度岩倉殿御下向等の一條を言上せり退出かけ大津を訪ひ  
六字頃瓦屋に歸て泊す入夜雨

(籠頭)  
竹田來疹

同廿五日 微雨十字湯田を發し一字頃勝坂、に至り小憩認食杉遠邨余  
于此に待てり相共に山を下り三田尻部署に至る其より貞永幽之助を訪

ひ九字間屋口竹内素助方に至り相泊す岩卿御著の都合昨今の日積りな  
れとも今に様子不相知

(籠頭)  
於貞永山根秀策に逢ひ相談す

同廿六日 晴西風烈楫取素彦坪井、貞永幽之助等來る十字過より相共  
に向島藤井鐵之助方に至る五字過歸宿夜山尾庸藏書狀來る

(籠頭)  
今日秀策藥を贈る

同廿七日 昨夜來風雪至曉て晴十一字頃坪井旅寓海老名屋に至る小酌相  
談楫取藤松等來る夜十字頃歸宿

同廿八日 晴朝書狀を認岡部仁之助三好軍太郎等へ書狀を出す山尾留守  
狀と皆吉田右一郎へ托す十二字頃與杉坪井鶴濱の貞永に至る終に于此  
一泊す

(籠頭)  
主人文右衛門上國之留守也

河野、尋來同人過日雲揚丸乗り豊後に至る此度日田巡察使よりの



御達有之歸港せり此報に巡察使回陣の事を聞余の胸算と反せり依其失望故に一書を急に日田縣に投せんと欲

同廿九日 夜來風雪尤甚四面皆如銀藤松同町貞永等來る平原平右衛門も亦尋來る終日或語或酌或又圍碁頃日餘寒尤嚴烈今年除夜尤閑靜近年如此の不遇歲暮昨冬國難之事なと相語各苦心奔走の狀を談す  
平原竹田の畫幅二山陽の畫幅一伊孚九の山水一幅を持來

## 明治四年

辛未春王

正月元旦 天晴風清春寒尤嚴四面之雪日に映し景光尤妙貞永の家内相集  
藤松等も亦來傾屠酒又與猿村試毫一箋揮畫一箋合作一箋元旦の作を揮  
ふ

朝輝映雪射高軒吹送東風第一番滿眼景光渾入戶江山流水皆君恩  
十二字軍艦に祝砲を發す與諸君相共に藤松に至る藤松多之助は十七年  
前與伊勢小湊到浪華阻風滯泊三田尻數日始て藤松之宅に至る此時伊勢  
誘ふに任す此間世事不變今日又爲此會實に人間之事不可圖且憾且喜與  
諸氏相酌相談す近年中如此閑靜の歲旦なし于時寒氣尤募窓を開けば飛  
雪紛々滿庭の竹樹皆如花依て又認一吟



短筇尋到友人家日色光寒雪影斜屠酒一杯吞未盡前園竹樹頓成花

入夜楫取同町等又來且酌且談

同二日 晴貞永蕉窓森寬齋等來る寬齋昨春鴻城に逢今又歸于京都主人多

之助請書依て數箋を染むる寬齋送別之作をもとむ

去歲鴻城餞我行今年華浦送君歸一離一別如流水京洛何時再會期

口に信せて相認食飯呑酒一字過相去て

興丸公御住居に出拜謁し又部署に至り楫取同町に逢ひ直に又貞永蕉窓

の宅に至る杉坪井始終同行也夜楫取同町山根等來る

同三日 曇又戲に揮毫島田助七を日田縣に欲遣過日此趣を相達せり同人

不快不能旅行故秋山周作來る依て松方鳥尾等への書狀を出す遠田甚助

池良等への書狀を託す、來訪酒肴を携來

同四日 晴一字頃堀江山城屋に至り于此一泊す

同五日 晴新築地を散歩し御船藏の内を通り伊木見に至る藤松多之助來

る楫取同町等も皆來杉坪井貞永始終同行今日肥後熊本藩湯治一に尋來

岩卿方御出之事に付爲其來藩せり依て杉と旅宿山城屋に至り相談す

同六日 晴岩卿方御著の報あり直に問屋口に至り山縣狂介に逢ふ大久保

西郷等も此日來漸彼藩の論も一定も之摸樣なり岩卿へ出又大久保西郷

兄弟河村池上等を訪ふ夜又岩卿に至り近情了聞せり

同七日 晴歸鴻今日岩卿始御入鴻於客館御門岩卿を御迎仕れり

兩公も客館にて御迎あり尤

知事公は柘木へ御出にて一應御迎被遊客館まで御先に御歸り被遊大久

保始へ尋待せり大久保と粗此度之大意を論す夜山縣彌八奥平數馬坪井

宗右衛門勝坂之本兵衛等來る小酌相談

同八日 晴山縣狂介三好軍太郎有富源兵衛等來る岩卿より御書翰到來せ

り二字過大久保を訪ふ西郷も同座なり二氏の旨趣を聞得せり余曾て版

籍返上之事を謀り終に天下歸于此故に基于此速に天下之方向を定め宇



内強固に并立するの基本を立んと欲し余從來寸地を有せず苦慮盡力既に二年餘今日稍時到此端開けんとす仍て其大意を論し要領を決す五字過辭去岩卿に至り亦余之主意を論す入夜歸宿客來不絶

同九日 雨今日

勅使藩廳へ御出 從二位公卿

宸翰御奉戴被遊畢て

勅使豐榮社へ禮拜劔一振御納めあり姪和田芳助來る夜坪井長屋山縣正

木國重等來飲今夕政廳へ出

兩公に謁し天下の大勢を論し且此度薩藩旨趣を陳述し入夜退出今日

兩公正に御聽取あり實に不堪感泣也

同十日 晴 老公

勅誼御受け被仰上候今夕大久保西郷政廳へ出

兩公へ旨趣を言上す五字過余岩卿へ出今朝二氏余の寓に來り此度余に

土州へ同行之事を請ふ余從其說終日客來夜は又友人等來飲

同十一日 晴今夕岩卿 兩公へ御尋問あり余も其席に陪す終日客來今夜

山縣狂介の宅に語る會せるもの久保杉也

(龜頭)  
今日奥平二水歸萩せり

同十二日 晴朝來客來如沸過日來肥後人屢來湯治一二外二名も來談十一  
字過杉を訪ひ共に政廳に出壯兵の一條其他の事を論議す五字退出湯田  
に至り岩卿に謁し大久保に逢歸途西郷始此度入鴻の人々を訪ふ皆明日  
より出鴻大久保一人明後日より發せり九字歸宿坐客如山

同十三日 飛雪如花當年之寒氣十七年來未曾有之說あり十二字

勅使御旅官にて 兩公より御饗應あり余も亦其席に陪せり三字頃廣澤  
に至り又湯田に至り大久保に逢ふ九字過歸宿客來無間斷實覺其忙

同十四日 白雪滿空四山如玉今朝

勅使御發駕小郡口より故大村兵部大輔の墓を被爲經三田尻へ御出明日



御發艦之筈也大久保も今朝發途十二字後新 御殿に出又御裏へ出拜謁  
其より政廳へ出後來着手の件々愚按之處を建言し五字頃又御裏に至る  
御兩方様へ拜謁し其より八幡山田等を訪ひ薄暮歸宿三文字屋虎二郎來  
る去年國難之節彼隱然力を盡す處多し依て余條公の御短冊一葉を與ふ  
今日客來如山凡山縣彌坪井宗大津四岡義寺内暢佐藤彌正木市兼重讓白  
根多秋良敦岡村熊其他不能筆客去已に四字に近し

同十五日 晴昨宵來る所の人々又皆來其他客滿家又糸米之農民盡來て余  
を送る十字過發途中村芳三郎大津四郎右衛門鹿島庄右衛門片山熊二郎  
等送て三田尻に至る勝坂本兵衛の宅にて小憩認食四字過問屋口に至り  
西郷大久保其他池の上等を訪ひ肥後屋に泊す楫取同町藤松山根等來る  
同十六日 曇天東風十字過揚碇昨日之人又艦に來て相送る五字頃佐賀の  
關を過る十二字過風波起欲雨

(籠頭)昨夜秋山周作九州より歸り來る松方鳥尾の書狀を持參り粗九州近情

を聞けり遠田甚助池良の書狀も到來張秋谷修篁相石之幅を得たり五  
岳も染墨三箋を贈る

同十七日 晴十字頃天氣穩なり四字前高知之湊口に着泊其より漁船に乗  
し湊に入り直に高知城下に至る于時一度家屋に憩息し其より浦戸町岡  
林某之宅に至り泊す已に十一字也小參事(以下欠)  
(籠頭)着船の處サエン濱に着す其處新築の酒樓多し

同十八日 曇又雨大久保西郷來訪此前板垣退助來談大略此行の主意を陳  
す同氏は三年前の知人にして昨年來尤相往來大に時勢を察し  
皇國前途之事に着眼藩政改革等も亦可見事多し共に諸藩の振興せざる  
を歎することあり依て今日の事余の説を陳し不問して直ちに相諾す去  
年來當藩の大參事也下村珪太郎亦來訪明日大久保西郷余等と同會の約  
をなせり余又大久保西郷を訪ふ四字頃より杉宮城等も余の宅に會す今  
晩板垣大參事福岡權大參事下村少參事等來訪藩政改革等の事を談す宮



城は主とし當藩改革之事を見聞の爲に同行せり且酌且談十二字過皆去  
同十九日 晴杉宮城等來る同行諸氏と城下中東西散步す街頭に壯少群を  
なし紙鳶之尾を竹竿にて争ひ奪を見る當國男子を擧るの家必紙鳶を揚  
け其尾を人に争ひ奪わしむるの俗ありと云其尾長きものは五六十丈を  
過歸途杉の旅宿に至り小睡六字頃一宅を設け板垣福岡下村等大久保西  
郷余を招く西郷始依て此行の主意を語る板垣等も亦從來の藩情を談し  
朝家の爲に盡力の邊元より異論毫もなし依て此夕の次第知事公へ達し  
明日決答の事約せり爾餘は只且酌且時事を談し十一字頃皆散大屬連も  
談終て酒席に陪す

同廿日 曇西郷來訪余も亦同行連と共藩廳に至り板垣福岡下村等に面會  
の案内に隨ひ騎兵寮屯兵所於訓練所騎兵訓練等を見る于時雨  
降る三字頃歸寓門前にて西郷等と別る大久保を訪ふ福岡余の寓に來る  
不在なるにより又大久保に來り昨日之決意を陳へり余薄暮歸寓西郷又

來て今日決答の趣を語れり○昨日知事公より紙と勝幅子を贈れり

同廿一日 晴九字頃高知を發す城下より舟にて湊に至る板垣余の寓に來  
る途中にて相逢彼は馬より下て在橋上余は在舟中浪華に相會するを約  
して去浦戸に出るの間江上の風光尤佳天氣も亦晴朗十一字前雲揚艦に  
乗る無間大久保西郷等も亦來る藩廳より鶏卵數百を贈る五字頃  
を過今日風波雖穩此處に至て艦の動搖尤甚東北風亦吹來て烈八字頃  
より風穩五字頃由良に至る

同廿二日 曇七字前より微雨十時前神戸に着す上陸所へ長門屋より廣澤  
之逢難事を告げり余等驚愕悲憤暫絶言語せり長門屋にて大久保西郷等  
に逢ひ去て布引へ一同至る榎村の書狀到來大略廣澤の變の始末を誌せ  
り廣澤去冬余に一書を送る奮勵大に時勢を歎し今日之事任する甚厚し  
余又其書を筒中に出し永訣を思數讀不堪流涕慘澹也  
王政一新之際只廣澤の一人政府上に余を助くるものあり今日の事を聽



實に兄弟の難に逢ふと雖如此の悼悟如何と思ふ河村兵部大丞中山神戸  
知事其他來客頻々小川彦右衛門も亦書狀を河村宗一も亦余を尋て來る  
朝廷上前途之事は元より私情におゐても片時も不忍ものあり且  
朝廷上にて余從來人情之輕薄此等の患依て來るを推知す故に此度同志  
盡力必至誓て欲一掃此等の害を明より東上に決せり  
殿川一助も東京より歸り在于此又來て近情を語る山縣篤藏は于此余を  
待てり

(籠頭) 兵部省より番兵來て余を護す雖辭敢て不許

今日肥後大參事安場逸平大田黒岩太來訪余中山當知事來談中に付面  
會せず依て又訪其宿暫相語る當時肥後藩一致一定大に奉

朝旨天下之振興を欲助且此度廣澤の難を承知し大に

朝廷の衰絶を歎し誠心吐露實に可感之事不少

兵隊來て夜白我旅寓を護す

同廿三日 晴山縣狂介熊野一郎等來着皆此度の變を聞長歎せり余等の論

と無相違河野龜太郎余を尋ね浪華より來れり三條卿と野村藤井への書  
狀を認め杉に託せり愚意の件々一々又杉に論し置けり河村大丞來訪杉  
四字過乘艦今朝安場逸平大田黒岩太來訪鳥尾小彌太亦山縣一同來着尋  
問せり

同廿四日 天氣穩諸子之促に隨ひ宮本三好河野等と蒸氣船にて上坂山縣  
も同船なり船中にて馬渡に逢ふ神戸揚碇十字浪華着十二字也于時兵隊  
已に揚陸所を護衛傳信機之妙尤相顯る常安邸に至て泊す山田松本佐々  
木其他客來甚多し松本佐々木は余を尋ね神戸來るの意にて山田書狀を  
持來れり

(籠頭) 山縣も來訪山田へ近情を語り只天下の一定たる基本確立有志分派の  
姿に至らざるを祈る

今日青木周藏寺より書狀を送れり



同廿五日 晴吉井源馬來訪大久保西郷來話余亦心事を縷述不覺涕泣塞胸言口より不得出先年來の時勢千苦萬辛而して世人不振百事之不振官員中二十年間の時勢を無事平安に消過し今日僥倖を以朝廷上に奔走するもの不少實に酸辛之地を不知依要を失する事多々長歎に堪へざる也安場大田黒等も亦來話出兵之御沙汰あり依て暫相滯大久保余等に面會すと云二氏之議論益切實なり二氏に神戸に逢ふ已に杉等と東行の筈也出兵云々にて俄相殘れり

(龜頭) 今夕大久保西郷を訪ふ兵隊之護來るを厭ひ兵隊に不告して出于時遂に西郷へ尋來れり

同廿六日 曇客來如山松田京都大參事も態と下坂來訪せり暫時事を談す松田は十年前の知己なり山縣山田三好等會合獻兵の情實爾他將來之目的等を論し未萌に着手の件々を謀る河内宗一郎會津人日下一郎を同伴せり日下は曾て余に身上を託す依て吉井等へ謀り置今日吉井へ添書せ

り河野日々來訪佐々木松本も亦來

(龜頭) 西郷眞悟來話

石田太郎來る當時大坂府之權典事也

五兵衛へ張秋谷之表裝を託し置けり

同廿七日 曇又雨朝長谷川に至り書畫を見る吉井源馬來話西園寺雪江亦來話品川省吾來訪山田山縣來話今日獻兵中へ着手事あり鳥尾も亦來談一字過門出大久保を訪ひ直に松島に至り乘艦兵隊護來揚碇は已に二字を過四字過着港布引屋に至る于時雨如麻夜殿川山縣來談

(龜頭) 此艦過日浪華に至る同艦なり今朝出立の都合にて期に後れり  
靈鑑寺宮内西川晋一郎同父壯一建言書持參

同廿八日 曇午後小晴昨夕今日と柏村高杉兩參事へ送る書面を認且愚案之壯兵一條外國人御雇に付人民へ御説諭云々士民にかゝわらす此際に付已下の人才御撰擧云々俗士陪臣愚民等大に惑ひ候上有志の壯士の望



みを御失ひ有之候ては實に長歎息する云々部署下役人探索之上正敷者を御撰抜の事云々頑愚を誘導する事肝要にて方職のものともうなつき合候て新令新法を出し候ては益頑愚のものは惑ひ候故迂遠のものを教諭誘導專一云々部署も大屬のもの無役のもの、情實不相知小民とももの惑ひ候は不氣付の氣味有之云々民事一條の件々を建言相認め兩參事へ送れり宮木今日より歸藩に付相託す孝人今日より同敷藩に趣けり旅寓におゐて一面曾て東京公使官にて一會せしことあり殿川も一同歸藩雲揚丸此夜二字揚碇と云過日來佛孝和睡之事を聞けり尤佛南部未降と云夜山縣長門屋來話十二字過三好一建歸港

同廿九日 晴朝中山當縣知事來談又西郷翁來話又板垣大參事來話小川より書狀到來孝人之贈物來る山田も一書を送れり小川大屬吉井民部大丞へ書面を出せり山縣素狂來話昨日ニユーヨーク着港今四字揚碇と云昨夜林少丞來る爲余に兵部省より十人之護衛兵同艦橫濱に至ると云百方

固辭

朝命を以參議を重せられし事に付不肯種々愚意を陳述し稍許諾せり四字乘艦五字過揚碇

同三十日 晴風波穩四字五字の間富峯の正面を過

二月朔日 曇北風甚烈六字過橫濱着艦上陸甚難與三好直にシミツ之居に至り正二郎にも面會通商司出張所に宿す曾て遠藤謹助の所居當時坂田通商權正之居也坂田は肥前之人也池上來話内海も亦來爾他客來甚多余從神戸乘艦其前氣分甚惡勉て當港に至る氣色又閉塞欲扑奮勵稍蘇然して發熱頭痛醫者羽賀 來疹、齋藤新太郎藤井八十衛來る

同二日 晴内海其他來訪二字過まで臥蓐與諸氏散步し余齒醫オリハタ之處に至り又字公使を訪ふ且今日 公より賜わる所の漆器縮緬等を公使



とケンフルマンに送る今日は字王生日且字國戰勝之祝をなせり字館甚修飭祝砲花火等を行へり夜與諸氏會飲談話

(燈頭) 字人雇人に付公使ケンフルマン餘程周旋せり

同三日 晴朝周布金槌小倉右衛門介河野光太郎來訪皆明日より洋行せり三子と余會て周旋する所也在留之人に傳言し且用事を託せり九字オリハタを訪ひ齒藥を受けり十字過横濱を發し一字前大森之梅屋敷に至る于時梅花半は開落せり二字河崎屋にて食事を認井上世外より人來る依て世外を訪ふ杉安戸野村藤井井上彌吉赤川雄三等に逢ふ五字過歸家長三浦小野杉山井上河村佐々木加藤齋藤天野澤畑其他客來數十人也相酌相談又共に時事を大歎し故友障岳之事に至り不堪語大隈も今日來て余の歸家を待と云昨日も余歸家を聞來るもの十餘人ありと云神田邸より兵八人來て宿直す

同四日 晴客來不絕大隈參議井上少輔山口中辨三浦少丞等來話

(燈頭) 森寺來話河瀬安四郎書狀到來

同五日 晴客來如昨日二字後雨至暮晴字人ケンフルマン

來話

(燈頭) 今日有富新助來話當時津野新左衛門と云

同六日 晴客來尤繁豐浦岩國兩知事公御出三吉慎藏長新兵衛下徳太郎隨從長吉公も御出なり門脇來訪板垣退助來談今日之事に係すること多し至于夜雨吉富來泊

同七日 朝雨作間來訪十字頃俄に三條公御出云々御相談あり皆此度の一條也昨日岩卿御歸京と云榎村半九郎より書狀到來

同八日 晴山縣素介來訪岩卿大納言殿御來駕後藤象二郎も亦來話四字三條公の邸宅に至る板垣退助杉孫七郎西郷吉之助大久保參議同席三藩之旨趣を建言す余時勢の變遷人情之有様を想像感歎難禁悲切之餘終に今日の體勢を論し不覺流涕潸然たり六字辭去與杉同馬車て歸る

同九日 晴三條公岩倉公御出昨日建言の主意尙余の深意を御推問あり且



山口藩建白の儀に付縷々條公より御演説あり依て不得止之深情を論陳せり六字前廣澤に至り神位を拜す實に不堪殘慨已に神位を拜し尙疑不信乎河瀬來泊

同十日 晴井上世外來訪下二介米田虎雄等來話正三卿御出今日

朝廷上御評議之趣御示あり明日西郷板垣杉御召之御都合也

同十一日 晴大久保參議來談山縣狂介三浦五郎等來話大木民平江藤新平來訪宍戸杉等來話三條公御書翰到來福原狂介昨日信州より歸り今日來話

同十二日 晴過る十日夜默然獨座時事を想像し且於三條公西郷其外會集之節懇切の餘從來之弊害の陳論す今又思其事不感慨認一書岩卿に呈す于時夜三字也其後未聞答今朝井上世外來訪岩卿よりの傳意を縷々了承又余不盡の意を陳述せり西郷吉之助來訪藩情且時情等を談し朝廷上之事に及へり山縣素狂も亦來談

同十三日 晴山縣篤藏三好軍太郎長岡精助等と染井別莊に至る正二郎も亦携へり十二字相達し同酌數刻其より又中村梅莊に至る梅花半零落雖然數百種餘花又不少香氣穿花々底皆茶樹其趣向尤妙主人薄茶數椀をすむ去て又別莊に歸り六字過歸家

同十四日 晴山縣狂宍戸三藤井勉來話昨夜世外より岩卿之傳意を以書狀到來又今朝一書來る其主意余參

朝云々なり今日已に岩卿辨官一同來駕と云依て余不得止病を勤め參朝三字過退出神田邸に至り豊浦岩國兩知事公へ伺野村藤井に面會暫山口藩情を論陳せり其より薩邸に至り西郷に面會告別又世外を訪ふ井田五藏太田里一亥和太に面會せり井上小豊後をも相訪于時病又發氣色甚惡依て直に歸家せり于時六字に近し杉野村宍戸へも亦世外樓に會せり今十二字地震近來屢震動然して今日の地震尤烈

(後藤) 後藤より書狀到來



同十五日 晴終日家居安場熊本大參事來談此度山口藩之難願書終不被及御沙汰改て薩肥土長などへ九州巡察使に隨ひ兵隊を出し取締云々の御沙汰あり付ては

朝廷御根軸御取締今一層被爲盡御手數度之主意を建言するの意あり是皆余等之常に患ひ常に歎し然して  
朝廷主裁之未一定もあり今藩々の建言を以て所事上策にあらずと雖天下三百年來三百餘之政府を立養來る所皆不同ものあり依て人情風俗言語に至るまで纒數里を隔つるときは皆不同隨て其度之相異なる不可言して可也故に同心同力凡今日の大勢を察し  
朝廷を助くるときは自然固陋或は俗論を壓滅するの一助あり故に余等不得止是等之舉ある又今日の一事とせり然るに今日山縣狂介西郷吉之助へ談せし意齟齬あり哉折角之主意凝滯に似たるを歎し安場其始末を語り以て余の意を訪ふ依て藩より建言するは自ら藩之分なり

朝廷上取捨するは又

朝廷にあり故にて建言書を出し不告の意を告安場喜て去岩卿御書翰到來

同十六日 曇岩卿御來話兩三内密の事件あり杉猿邨來談米田安場兩大參事又來談山縣素狂來談時田少輔三吉慎藏長新兵衛來話一字過大久保參議を訪ひ四藩建言の次第を談す其より神田邸に至り杉に面會四藩建言一條に付其次第大久保と相談する所を告且御國內布告又因備關係等の事を内談す歸途宍戸刑部少輔を訪六字過歸家夜杉山山縣等と此度新聞局開局の主意を語る遠境之人をして諸藩の改革宇内の大勢爾他時勢近情の情を知らしめ開化の境に促すを欲する也福井も亦在坐て相談今日寺内眞一を神田邸より連歸る

同十七日 曇又雨又曇又雨又晴十字前參

朝三字退出岩卿へ愚按數件を論述す後藤雲濤を訪ひ談論數時六字頃歸



家今日岩國横道出京雁二羽を贈宇和島大藏卿より小鴨五羽を贈る葦山岡田三郎來る

同十八日 晴十字參 朝三字退出伊藤寛齋を訪ふ又伊藤芳梅の留守を訪ひ米國へ好便あるを聞芳梅と姪彦太郎へ一書を認相送る其より平岡東京權大參事を訪ひ數刻時情を談論且暗殺人探索一條吟味等の事を細論す七字頃歸歸

同十九日 晴十字參 朝今日福島縣頑民蜂起の事を聞元來兵部越奥羽等へ屯兵之事議す今日又此事を論す三字過退出其より神出邸に至り長府三吉慎藏に面會し知事公御學問等の事を談論す其より有約又後藤を訪ふ板垣退助も亦來る且酌且語十一字相去

同廿日 晴野村素介藤井勉三等來談三隅市之進來る三隅は少年中又可頼之人にして且篤志なり依て余去年來助彼志歐行を遂させんと欲漸今度民部の撰擧にて農學修業米行の命あり故に來る諸事を相談す大久保山

縣へ書狀を投す大久保答書に岩卿に來會の事あり依て又岩卿に至り數刻相會議す久留米之事又福島之報あり浮浪不平之徒を煽動せりと云杉猿村來る岩國知事御兄弟御出なり五字過容堂公も御出酌酒雜談至十二字皆散

同廿一日 曇大島似水來訪三吉慎藏來話知事公拜謁し御學問の一條を談す杉山耕太郎より加藤弘藏に託し其人を欲得縷々論し置けり二字過小原鐵心來訪今日岩國人と有約宍戸同行有明樓に至る十字兩國橋より上陸人力車に乗歸國東京に人力車行はれ余今日始て試此車宍戸亦連車て歸る

有明樓より暫時土容堂公を訪ふ不在

同廿二日 晴七字過岩倉卿に至る時務を談論し九字過參

朝二字過岩倉大久保余

御前に被爲召酒饌を賜ふ四字頃退出其より染井に至る滿庭の櫻花七八



分綻ひ風光尤佳雖然當年之春去年之春に異なり心甚不快ものあり今日  
は後藤雲濤夫妻杉猿村平岡平夫妻伊藤老夫妻其他數客來て賞花八字過  
皆散九字過歸家

同廿三日 晴南風卷塵二字頃より障岳の暮に詣今日障岳之暮字を認憾情  
難止春夕又如秋暮三條公に至り謁て愚意數ヶ條を建言す皆今日の急務  
也其より又宍戸を訪ひ廣澤に至り又三浦を訪ひ六字過歸家加藤弘藏來  
訪酌酒數時談論于時永安長吉富笠原齋藤杉山吉村其外客來數十且酌且  
談二字過就寢

(燈頭)  
今日正二郎大藏省出仕被仰付以分課英國被差越候段御沙相成候事

同廿四日 曇又雨宍戸山縣井上其外昨夜之客も皆相泊坐中充滿送客尤盛  
十時前相發し外務省門前に至り外務省の馬車に乗り替へ二時頃横濱山  
城屋に達す于時シミツ正二郎を携來て在坐相語る數刻濱田佐藤知縣事  
白根多助等に相逢爲佐藤に大隈へ一書を添ふ豊原、來訪此人は正二

郎等の連を訪ひ洋行の命を受けり依て井上世外之傳言を以來て相告正  
二郎歸國の事をとむ正二郎も有病故に余今暫欲加保養終連歸るに致  
せり四字山城屋を出豊原を訪ひ又シミツを訪ふ于時於途中シミツに逢  
ひ艦まで送り來るシミツ正二郎に別る離別之情甚切涕淚漣々余亦シミ  
ツ之心思を察潸然漸久五字揚碇艦名コルデンエジ

(燈頭)  
同艦の人杉野村三好徳山の遠藤貞一郎等也

乘艦の時雨尤甚

同廿五日 雨昨夜來腹工合甚惡氣力尤疲五字紀州大島之内を過る

同廿六日 雨七字過布引屋に至り認食事十時過福山の蒸氣に乗り二字過  
坂着其より常安邸に至り六字過杉野村小川等と播吉を訪書畫を見る其  
より又川佐樓に至る十二字歸邸三條岩倉卿英國留學の河瀬等へ送る書  
を認む于時過二字夜半風甚烈

(燈頭)  
張秋谷之表裝調ひ、持來る



同廿七日 晴杉野村小川等と大吉に至る主人不在其より新齋橋通へ出河吉に至り書籍を求め又主人所藏の竹田秘藏の幅を一見し又山中に至り書畫數十幅を展觀し二字過山田市を訪ひ食事を認又共に舟を櫻宮に浜堤上の櫻花を見る舟中無茶無酒眞の閑遊也而して興も亦甚妙櫻宮堤上を散歩亡子勝三郎の甲子の秋此地に斃るゝを思起し心中甚悲切風光亦爲是寂蕭たり其より遠藤謹助を訪ふ又造幣寮中を一見す歸途相共に舟を北堀に入れ川佐樓に至て酒食相認む十一字歸邸十二字過井田五藏來訪大に東京之事情懸念し

朝廷上之爲不良徒を一洗し官中整肅威嚴之凜然たるを願ふ實に朝廷上の事口を開くるに不忍もの多し余等此間之苦心不堪語也

同廿八日 雨大吉播吉山中等之諸骨董家來る此度得る所の珍器古銅之鈞瓶古銅香爐古染付花休山湯高濱の一幅小切二枚を合す是等之品也世外素狂等へ送るの書狀を認む吉井源馬山田市之丞等來る宗像宗十郎大岡大眉も

亦來訪四字前邸前より舟を泛へ松島に至り川蒸氣 に乗込六字過神戸に達し布引に宿す

同廿九日 晴朝散步時計其他雜具を外國店に求む十字過丁卯艦に乗込富士艦船將 來訪十一字過揚碇四發の祝砲を發す富士艦より十五の祝砲を發す丁卯艦に砲數纒なり依て四發發砲せり近頃是等之式も定ると云余在官未知此審同行之外大阪より田中敏助來艦

同三十日 曇八字頃より雨曉に靄の沖を過十一字過御手洗を經六字頃上の關に着す于時雨纒歇肥後屋を訪夜に入又雨戌辰之春浪華の戰爭未發に山口を發し途中に上國の不穩よしを聞心中甚切迫然して爲風に阻てられ此家に止る事數日終に風潮をおかし廣島に至り蒸氣船を借り直に尾道に至る今夜往事を想像し感慨も亦不少十一字過歸艦揚碇于時西風甚烈周洋に出る不能依て又入上關



昭和七年十二月二十日印刷  
昭和七年十二月廿五日發行

木戸孝九日記第一

非賣品

不許  
複製

木戸侯爵家藏版

編纂者 妻木忠太

東京市四谷區新堀江町三番地

日本史籍協會代表者

發行兼印刷者 早川良吉



156T-11

1993

不  
備

民國二十九年十月二十日

中華民國二十九年十月二十日

本  
局  
為  
辦  
理  
各  
項  
事  
務  
特  
此  
佈  
告



終